一応の完結をみた。㉘またこの報告書のサマリーとして，同名の要約が「カシオ科学振興財団研究成果報告集」（昭和59年度）に掲載された。

以上に加え，現在「組織心理学」（松原との共編，福村出版）と翻訳書「組織コミットメント」（佐野と共訳，千倉書房）の仕事が進行中である。また，Graen 教授との共著 "Japanese management progress : Tournament mobility into middle management" は現在JAP誌においてレヴェー中である。

研究経過報告

村上　隆

文字通り，またたくまに夏がおわり，これを書いている（正確にはワープロに打ち込んでいる）現在，既に9月になっている。したがって，本報告は，85年8月から86年8月までの主要事項を記すこととしよう。

1．このところメイン・テーマとしている，多集合データの因子分析的取り扱いについては，本紀要に最近の成果を載せることができた。また，従来提案してきた方法のアプリケーションとして，

斎藤和志・村上隆・若林満　1986　準3相因子分析に基づく組織イメージの構造　経営行動科学，1，27-40.

村上隆・斎藤和志　1986　多集合因子分析による組織イメージと組織活動の関連の検討　経営行動科学，1，41-53.

を刊行することができた。後の論文は，昨年本紀要に発表した，多集合因子分析と3相データ解析の特徴をミックスした新しい方法の提案を含む。更に，多集合因子分析の適用により，因子構造の発達的変化の記述にある程度成功した，

斎藤和志・村上隆・若林満　印刷中　組織の就職先としての魅力と職業志向性およびライフ・スタイルとの関連

が，本紀要刊行の頃には既に「経営行動科学」誌上にあらわれているはずである。これらに加えて，なお若干のアプリケーション論文を準備中である。

次に，本年2月7日に，3相因子分析モデルの権威である，ライデン大学の Kroonenberg 氏を迎えて行われた行動計量学会月例シンポジウムにおいて，"*TUCKALS 2* from the standpoint of traditional factor analysis" を発表し，当日と翌日，Kroonenberg 氏とかなり詳細な意見交換ができたのは幸いであった。私自身の1981年以降の仕事は，同氏の1980年のペーパーなしには考えられないものであり，これは大変有難いことであった。（同氏の招聘を実現し，シンポジウムの企画その他にいろいろと御尽力いただいた，製品科学研究所の宮埜寿男氏に感謝したい）Kroonenberg 氏は，どちらかと言えば，多次元尺度構成の文脈から，3相因子分析をとらえており，私の方は，古典的テスト理論に基づく個人差測定の文脈でものを考えている点で，モデル自体についても，アプリケーションのあり方や結果の解釈についても，考え方にはかなりの隔たりがあるように思われた。しかし，私のアルゴリズムについては，同氏もその有用性を認めてくれたようで，最近それに基づく共同論文を執筆しようという申し出を受けた。ただし，これはどんな形のものになるか，いまのところわからない。

モデルそのものについては，一応可能性を究め尽したと感じていたが，アプリケーション上の意味をいろいろ考えるうちに，モデルについて少し違った観点から考える必要を感ずるようになった。すなわち，従来データをもっともよく説明する，すなわちデータに対して最小2乗法の意味で最適のあてはまりを示すパラメータの推定という観点からのみ考えてきたが，むしろデータの1次結合としての合成変量を導くという観点も重要なのではないか，ということである。通常の主成分分析は，どちらの観点から見ても全く同一の結果になるから，この区別が explicit にはなされていない。（解釈にあたっては，これらの観点が適当にミックスされていることが多い。）この観点から，本紀要の段層的主成分分析を考え直してみると，また新しいモデルが生まれてくる。更に興味深いことに，制約条件をわずかに変えることによって，正準相関分析を3つ以上の変数集合に適用可能な形に一般化したようなモデルもできる。8月後半以降，学会その他をはさんで，ほぼこの仕事にかかりきりになっ

てしまったが，これについても近々公表することができるものと思う。

2．2年目を迎えた「外国人日本語能力試験」に引き続き調査員として参加している。1年目の結果は，大坪一夫（筑波大学）野口裕之（東京学芸大学）両氏とともに，昭和59年度日本語能力試験　分析評価に関する報告書

外国人日本語能力試験企画小委員会

にまとめたが，この報告書は，<部外秘>の扱いになっているので，少なくとも数年間はお目にとまることはなさそうである。

それにしても，日本語版 TOEFL への道が，最初考えていたより遥かに遠いものであることを実感している。これは，この仕事にかかわる個々人の意識の問題と言うより，テストの果たす社会・文化的機能の彼我の差の反映であり，我々の世代のうちに，TOEFLに追いつくことは不可能であろう。ETSは独自に日本語テストを開発し始めた模様で，それにも比肩しうるものになるかどうか疑問である。ただし，このような比較は，あくまでもETS流の価値観を前提としての話であり，わが国でその方向を目指すことが適当かどうかは，十分議論の余地がある。

全くの独断的見解であるが，アメリカのような多民族国家では，いやでもそこに1次元の能力の物差しを設定し，その精度を高めていかざるを得ない必然性があったのに対し，わが国ではそのような方向は従来社会的要請としては存在しなかったのではあるまいか。入学試験をめぐる議論にしても，それが主として受験生の負担の面から論じられ，試験の得点そのもののメカニズム（テスト理論の用語で言えば，信頼性と妥当性）について論じられることはほとんどない。その意味では外国人のための日本語テストは，その種の問題を本気で論ぜざるを得ない最初の機会なのではないかと思われる。（試行試験のときから既に若干の「国際問題」は発生していた。）

しかしながら，一方において日本の国情，あるいは日本人の能力観といったものが，日本人によるテストには反映せざるを得ないし，また，それはそれでよい。いわば，わが国の心理測定における最初の異文化接触の機会なのであろう。少々無責任な言い方だが，今後が楽しみである。

日本語能力の測定の問題に関しては，日本語教育学会の「認定委員会」のメンバーとして，月に約1回の会合に出席し，いわばもう少し地道な努力をしている。この方の成果は，2年後には「日本語テスト入門」といったタイトルの書物として世に出ることになろう。

3．いつになく多くの紙幅を費やしてしまったので，これ以外の仕事について述べるのは差し控えたい。ただ，最近ようやく自分が教室内外で研究者として果たしていくべき役割が明確に自覚できるようになったように思われる，ということだけは記しておきたい。これはまた，研究というものが，真空中で行われているのではなく，個人のおかれた文脈との交互作用の産物である，ということの自覚でもある。質の高い文脈をあたえ続けてくれている教育心理学教室に深く感謝している今日この頃である。

研　究　経　過　報　告

河　合　優　年

1985年から1986年にかけての経過について述べる。文部省の若手在外研究員として1985年4月より1986年2月まで米国で研究に従事する機会を与えられた。まったく新しい環境に当初は戸惑う事も多かったが，多くの友人と学生の助けにより，考えていた目的以上の事が出来たことは幸いであった。

主な滞在先は，Purdue University（West lafayette,Indiana）であった。ここでは，乳幼児の行動をどのようにとらえ分析するか，そしてそれら研究をリードする理論をいかに展開するかを同大学の発達研究グループ（PIG:Purdue Infant Research Group）の仲間と検討した。これらの結果の一部はICIS（International Conference on Infant Studies; 1986, Los Angels）において発表された。また，その理論的な部分については1987年に東京で開催されるISSBD（Internatioal Society for the Study of Behavioral Development）のシンポジアムで発表することになった。その他，上述の研究に関係して，発達初期におけるラテラルドミナンスの状態を三カ月児を対象として研究した。これらの研究は現在も継続中である。